



| | |
|------------------|---|
| Title | ファーズ博士のこと (20周年記念号) |
| Author(s) | 岩間, 徹 |
| Citation | スラヴ研究, 20, 215-219 |
| Issue Date | 1975 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/5058 |
| Type | bulletin (article) |
| File Information | KJ00000113020.pdf |



[Instructions for use](#)

ファーズ博士のこと

岩 間 徹

ファーズ博士 (Dr. Charles B. Fahs) にはじめてお会いしたのは昭和 26 年 (1951) のことだったと思う。場所はよく覚えている。帝国ホテルのロビーである。当時博士はロックフェラー財団の要職にあった。勿論、私から会見を申し入れたのではなく、先方から会見を申し込まれたのであったが、どういらいきさつで私のようなものが会見を申し込まれたのか、さっぱり見当がつかなかった。

博士はもの静かな紳士で、とくに深く青い湖のようなその眼が印象に残った。若いとき日本に留学し、東大で臘山政道氏の指導を受けたということであった。おそらくアメリカにおける知日派の一人であろう。その席でのお話の要点は、日本でロシア・ソヴィエト研究を組織する必要があるのではないか、ということであった。正直のところ、この話をきいて、私は一種のとまどいを感じたことを覚えている。そんなことを一度も考えたことがなかったからである。

大学時代からロシア史の勉強をはじめたが、それは提灯を持たずに暗い夜道をゆく旅人に似ていた。たしかにあの当時私は学問上の恩師や先輩や友人に恵まれていて、そういうありがたい人びとの顔が次から次へと浮かんでくるが、しかしロシア史、とくに私の研究そのものを指導してくれる先達にはめぐり会えなかった。いきおい私は孤独の道をゆく以外になかった。そして所詮、学問とは市場の雑踏の中にあるのではなく、書斎の静寂と孤独の中にあると観念した。孤独の道をゆくこと、それが習 (ならい) 性 (せい) と成った。現在でもまだそれが尾を曳いている。いわんや、ファーズ博士に会った当時においておやだ。

ファーズ博士は日本におけるいくたりかのロシア・ソヴィエト研究者の名をあげた。そのなかに親しく知っている人もいたし、また名前だけは知っていたが、会ったことのない人もいた。おそらく博士は日本滞在中にこれらの人びとと会って意見を交換するつもりだったのだろう。私もその一人だったわけだが、さきほども述べたように、真暗闇をとぼとぼ歩いている、突然、懐中電燈のあかりを眼の前に突きつけられたようなものだったから、これといった立派な意見などありようはずもなかった。慣 (なれ) は馴 (なれ) にもなる、というにがい反省があった。孤独に「慣」れているうちに、いつのまにか孤独に「馴」れてしまって、孤独の中のたたかいを忘れて、孤独に甘えている自分を発見した思いであった。閑雲野鶴を気取っていたものの、実はその殻をもって天地とするさざえや、またその外包をもって世界とするみの虫のようなものだと悟った。

その年 (昭和 26 年) の夏、私は信州富士見高原の別荘を借りて仕事をしていた。ある日のこと、当時北大の教授だった木村彰一氏が訪ねて来た。お会いするのはそのときがはじめてである。木村さんがわざわざ信州まで訪ねて来られた用件は、ほかならぬロシア・ソヴィエト研究の組織であった。そしてその具体化として北大に「スラヴ研究所」を設け

てはどうかというお話であった。北大にはロシア語・ロシア文学、ロシア史、またロシア・ソヴィエトの法律・政治・経済などの分野にスタッフがいること、これが「スラヴ研究所」を北大に設立するひとつの具体的根拠になっていた。しかも当時日本では文化の地方分権がしきりに説かれていて、なんでもかんでも東京集中という傾向に対する批判の声があがっていたこともあって、文化の地方分権が研究所を北大にという主張のいわば理論的根拠になっていた。私は木村さんのお話を伺って、ファーズ博士の構想が具体化の一步を踏み出したと実感した。私はこころよく協力をお約束した。

この日の木村さんとの出会いは今でも楽しい思い出のひとつになっている。富士見の別荘では留守番の老夫婦が食事の世話をしてくれていたが、たまたま豆腐が好きだと一言もらったおかげで、私は毎日のように豆腐ぜめにあっていた。今日の夕食は二人分用意してくれるように老夫婦に頼んで、木村さんと一緒に八ヶ岳の連峰の見える丘を下りて、富士見駅の近くまで酒と罐詰を買いにかけた。

その夜の食膳に豆腐が出たことは勿論だが、買い込んできた罐詰類をあけて、一緒に酒をのんだ。飲むほどに酔うほどに談論風発し、酒が切れてしまった。そこでまたまた二人で町まで出かけ、酒を買い込んできて、のみつづけた。その夜おそくまで二人で鷗外、漱石論をたたかわした。木村さんは鷗外を、私は漱石を推して、おたがいにゆずらなかった。

その翌年のことだったと思う。ファーズ博士が北大に来られる、については札幌まで御足労を煩わしたい、と木村さんから連絡があった。あれから木村さんは「スラヴ研究所」設立のために種々奔走していたとみえる。このとき木村さんは北大文学部の有志教授会(?)にファーズ博士を紹介し、懇談会をやった。私も陪席した。ここは文学部の教授会をやる会議室だそうで、木造の建物の二階にあった。箕子の廊下を渡って、がたびしする階段を上って入ったこの部屋は、まことにあられなく、寒々としていた。懇談会では「スラヴ研究所」の設立が直接の話題にならなかったと覚えている。しかし、おそらく、木村さんは「スラヴ研究所」を文学部に置くことを考えて、同学部の教授をあつめて懇談会をやったのだろう。この考えは結局実をむすばなかった。周知のように、「スラヴ研究所」は文学部でなく、法学部に付属することになったのである。

その後も木村さんを中心に北大の関係スタッフは研究所の組織づくりとその官制化の準備を進めた。その準備は着々と進められた。ファーズ博士が北大に来学した翌年、つまり昭和28年(1953)に文部省から科学研究費の交付を受け、北大の関係スタッフに東京や京都のスタッフを加えて、事実上「スラヴ研究所」の研究活動がはじまった。共同研究のテーマは「ナロードニキ研究」であった。最初の研究会は北大でやった。東京や京都から加った創立当初のメンバーは札幌の宿舎一宮部会館といった一に勢揃いした。現在、これらの人びとは全部引退している。今昔の感に堪えない。

ソヴィエトにおけるナロードニキ研究史には大きな断層と歪曲があった。1930年代の半ばごろから1956年の第20回党大会まで、およそ20数年間、悪名高いスターリンの個人崇拜の影響の下で、ソヴィエトの学界はナロードニキ研究を歴史の研究対象から外してしまった。たとえ研究されたとしても、一面的且つ否定的見地からなされていたといっている。『共産党小史』のナロードニキ観が横行していたのだ。この断層と歪曲が克服され

ファーズ博士のこと

たのは第20回党大会以後のことだ。かつて(1968年)私はモスクワのレーニン図書館でナロードニキ関係のカタログを漁りながら上述の研究史の断層をまざまざと実感したものだ。それはさておき、私は今でも忘れないが、「スラヴ研究所」が事実上発足し、ナロードニキ研究にとりかかったとき、研究員の間で以上のような研究史の断層と歪曲が問題にされた。とくに『共産党小史』にみられるような歪曲が問題にされた。念を押していうようだが、「スラヴ研究所」の研究活動が事実上はじまったのが1953年であって、ソヴィエトにおける前記党大会より3年前のことである。このときすでに私たち研究員の間でソヴィエトにおけるナロードニキ研究史の断層と歪曲が問題にされていたという事実をここに特記しておきたいと思う。

最近のソヴィエト史学界で革命的ナロードニチェストヴォを研究する場合、その研究主題はロシアのマルクス主義とこれに先行するロシアの革命思想・革命運動との連続を示すことにあるようだ。そしてこの連続の環は革命と民主主義にあるようだ。私たちはすでにこの連続を考えていた。だからこそソヴィエトにおけるナロードニキ研究史の歪曲を問題にしていたのだ。ただ、同じ連続をいうにしても、ネチャーエフやトカチョフをレーニンに結びつけることは、ソヴィエトの歴史家たちにとって無性に腹が立つことらしい。このような継承関係を主張したのはベルジャーエフやカルポーヴィッチであったが、ボリシェヴィキを革命的民主主義の伝統から引き離して、彼らをナロード大衆の革命運動と結びつかぬ「陰謀家」とする傾向に対して、ソヴィエトの歴史家たちは猛然と噛みつくのである。人は痛いところをつかれると腹を立てるものらしい。

「スラヴ研究所」が北大法学部付属スラブ研究施設として官制化したのが、昭和30年7月1日であって、その前年末、私はロックフェラー財団の研究員としてアメリカのコロンビア大学ロシア研究所に留学した。ニューヨークに着いて間もなく、ロックフェラー・センター所在の財団のオフィスにファーズ博士を訪ねた。博士は当時 Humanities の Director であった。私を迎えた博士のこやかな笑顔を私は忘れない。その後、お招きをうけてニュージャージーにあるお宅へ伺ったことがある。固くなっている私の気持をときほぐそうとしていろいろと心づかいをしていただいた親切を私は忘れない。お嬢さんが私を相手に五目並べをしたのも、実は博士の心づかいだと察せられた。博士御夫妻からオペラ見物のお招きを受けたこともある。留学中の夏休みを利用して、私はヴァermont州のミドルバリという小さな町のロシア語学校で生活したが、このときも博士御夫妻がドライブ旅行の途次立ち寄って、町のホテルのレストランでお招きを受けた。このロシア語学校では寮生活を原則とし、朝起きてから夜寝るまでロシア語以外の言葉を使ってはならぬ規則があって、このおきてを破れば退学を命ぜられることになっていた。博士のお招きを受けてホテルへ出かけるとき、校長から今日は英語を使ってよろしいと特別許可がおりた。あのとき博士は右手に繻帯を巻いていた。自動車のドアにはさんだのだと苦笑していた。申しわけないが…とって、左手で握手の手を差しのべたのを覚えている。それからまた、留学中、ワシントンでアメリカの史学会大会が開かれたときのことだが、ロシア史関係者のお茶の会にファーズ博士が顔を見せ、私のためにハーヴァード大学のカルポーヴィッチ教授その他に紹介の労をとって下さった。あれもこれも懐しい思い出である。

留学中に「スラヴ研究所」は官制化した。官制化以前の組織づくりについては、私の前

にアメリカに留学した木村彰一教授が、ハーヴァード大学やコロンビア大学などのロシア・ソヴィエト研究機関をつぶさに見て、それらを帰国後参考にして仕上げたものらしい。ただ、日本の「スラヴ研究所」の独自性はその研究員構成にある。つまり一大学のスタッフのみで構成するのではなく、他大学のスタッフをも加えたのであって、intercollegiate といふか、interuniversity といふか、それが特色であった。その独自性は今日も継承されている。

スラヴ研究所はその発足のそもそもの最初からいわゆるひもつきの研究機関ではなかった。なるほど、その創立に当ってロックフェラー財団からスラヴ関係の学術雑誌のバックナンバーの寄贈を受けたし、また2・3の研究員に海外留学の機会が与えられたりした。しかし財団は金を出したが、口を出さなかった。「スラヴ研究所」をオーソライズするのは、日本の政府であって、ロックフェラー財団ではない、という言葉は私は何回かフェーズ博士の口からきいた。そのとおりである。

最近、アメリカの前上院議員、J・ウィリアム・フルブライト氏が国際交流基金受賞で来日した。受賞記念講演「世界平和と国際交流」の一部が新聞紙上に紹介されていた。その中で次のような言葉が心にとまった。「国際教育は一国の外交政策の道具に使われてはならない。絶対に、一国のイメージアップ、PR の手段に利用されてはならない。教育交流が外交政策の手段として扱われるならば、教育の腐敗であり、必ず失敗する」と同氏は強調している。ここで取上げた問題は教育の国際交流であるが、研究の国際交流も同様であって、それがいやしくも一国の外交政策の道具に使われてはならない。その結果はいわずと知れたこと、研究の自由は失われ、その成果は硬直する。

フルブライト氏の記念講演の一部を読んで、私はフェーズ博士の節度ある態度を思い出した。前述したように、「スラヴ研究所」の構想そのものは、私の知るかぎりにおいて、フェーズ博士から出た。しかしその後の組織運営はまったく北大スタッフの自主性に任せた。あたり前のことじゃないかといえ、それまでであるが、そのあたり前のことが仲々行なわれないからこそ、さきほどのフルブライト氏のような言葉が出てくるのであろう。

「スラヴ研究所」の発足準備の開始が昭和26年(1951)だったとすれば、この年は、1月以来、ダレス・吉田会談を通じて単独講和の準備が進められ、3月、対日講和条約草案の発表、8月、最終草案の発表、つづいて日本の講和全権団の出発、そして9月8日、対日講和条約が調印され、日米安保条約が調印された。ここに6カ年にわたる占領に終止符が打たれ、日本は独立したが、同時にアメリカの前進基地としての役割を担うことになった。このような状況の中で「スラヴ研究所」の創立準備が行なわれたのだから、というわけで状況証拠から短絡的にひとつの事実を確定しようと猪突猛進して、やれあれは日米安保体制の一環だの、やれアメリカのひもつきだのときめつけるとしたら、私はこのきめつけ方にくみしない。このきめつけ方は私のなまの実感が否定するからだ。誰かの道具になった覚えもないのに、お前は奴隷だといわれたら、そういう相手の幻想に身ぶるいするのは、私ばかりであるまい。笑いとはしてもいいが、やっぱりおそろしいのは、それが思想の鎧をつけた幻想だからだ。かつて私は徳富蘇峰の「吉田松陰」を愛読したが、その中で蘇峰学人は「世に恐るべきは偏理的哲学者と執迷的妄信者なり」と喝破し、偏理的哲学も冷たい論理だけならば、まだしものことだが、それが宗教的熱気と触れるにいたら、

ファーズ博士のこと

実におそろしい、と書いている。思想の鎧をつけた幻想のおそろしさを語っているのであろう。そのおそろしさは戦時中いやというほど身にしみたはずなのに、戦後も、そしていまもそれが別の形で日本の精神風土のなかに生きているとしたら、そらおそろしくなるのは臆病な私のみではあるまい。

「スラヴ研究所」の創立 20 周年を迎えて、創立の産婆役をしてくれたファーズ博士に感謝したい一念からこの一文を草した。ひょっとしたら長い歳月の流転の中でうたかたのように博士の名は消えてしまうかも知れないと思ったからだ。産婆役であったにもかかわらず、博士の姿は「スラヴ研究所」に大きな影をおとしていない。それだからこそ、言葉を換えていえば、嵩にかかった力のおごりらしきものがなかったからこそ、かえって博士の寄与は貴重だと思うのである。1951 年の日米安保条約におけるダレスの影のようなものはここにはない。ファーズ博士の場合は、暑熱の中をさっと吹きすぎる一陣の涼風のようなさわやかさを残しているだけなのだ。このことはもの静かな博士の節度ある態度のおかげであろうし、だからこそそいよいよ忘れてはならぬ人だと思うのである。